

T.S. ELIOT

OLD POSSUM'S

BOOK

OF

PRACTICAL  
CATS



# Well

腹がへってどうにもならない。目の前がぼんやりして、とても寒い。なんたってこんなにうろろ歩き回ってるんだ俺は。もうどこにも逃げようもないってのに。桜の枝が重く垂れ下がっている。あの花がみんな実をつけてくれたら、俺は今すぐにでも腹いっぱいになれるのにな…木だって草だってこの今の俺よりは満腹だろうちくしょう。春だっていうのになんて寒いんだ。氷のような雨が俺をたたきつける。寒いと思ったら今度は震えが止まらない。頭はががんと火がついたみたいに熱いぞ。ちくしょう。こんなところでくたばってたまるか。

あ、あの桜の木の向こうに見えるのは何だ？

家だ、すごく立派な家だ。温かそうな家だ。こうなったら押し込みだってなんだってかまやしない。どうも人はいないよげだ。この山奥になんたってこんな立派な家が…

温まってくると、こうして窓越しに見える冷たい雨に打たれる桜の木が可哀そうに見えるもんだな。お気の毒さま…だ。

暖炉がある。それにスープもある。おあつらえ向きに、ウイスキーまで。着るものもある。俺にぴったりだ。しかし、こんなに人気の無い家になんたって食べ物まであるんだ。まるで俺の来るのを待っていたみたいだ。そんな都合のいいことがあるわけないか。いつだって自分に都合よく考えて生きて来た俺だ。気にすることはない。

この服も頂くとしよう。ついでにあのドアを開けると気持ちのいいベッドがあるらしいな。あるある。

あ～あ、もう何も言うことない。このまま、もう死んだっていいくらいだ。こんな思い通りにことが運ぶとは、俺にも運が向いてきたってことさ。

しかしこのベッド…なんか変な具合だな。

なんかどろどろしてるぞ。なんだ！？さっきの桜の木の根っこに寝てるだけじゃないか。それに体もぐっしょり濡れて…

羽根布団と思ったのは、桜の花びらだったのか。熱で頭までおかしくなったらしい。

ま、いいか、こんなのも…

いまにまたあいつが俺を迎えにきてくれて、すべてはうまく行くさ。

この世は俺に都合よくできてるんだ、今だってけっこうまくいってる。そうさ、何もかも…

# COLUMN 鎌倉の猫事情 第四十二話

つばめが飛んできました。

ご近所の床屋さんの軒には毎年つばめが巣作りをするのです。もう2週間もすると、軒先からたくさんのかわいい黄色い嘴が巣からのぞいているのが見られることでしょう。

犬たちは、空に向かって鼻をくくんくならしています。グーニー君は時々白目がちな目を少し開けるくらいで、すぐにまた腕組みを直してえらそうに寝ています。スーピーちゃんは、少し落ち着かないようです。時々不安そうぶ、心配そうな目をして周りを見渡しては、少しため息をついたりしています。今は春です。出産の季節なのです。

いつもなら、大きなお腹かかえて、巣作りをしたり、赤ちゃんの分までうんとご飯を詰め込んだりしなくちゃいけない時なのです。今年はお産がなさそうなので、それでなんとなく落ち着かないのでしよう。もう何度もお産をして、たくさんの子猫たちをひと立ちできるよう育てあげては、世間に送り出してきました。

時々、いつも自分がお産と子育てをする押入れを覗きに行つては、なんだか考え事をするようです。旅立っていった子猫達のことを思い出すのでしょうか。それともかわいい口で一生懸命おっぱいを吸っていたのを思い出すのでしょうか。

スーピーが初めて出産したのは前号でメジロと戯れていたスミシでした。その最初の時から、お産が近くなるとスーピーはなんだか毅然としてきたものです。そして、普段は無口で自己主張しないスーピーが、私のところに来て、今日はいいよ、産みます。いいですね。本当に産みますよ、と、そっぴりと言うのです。この時だけは、スーピーは話ができるのです。そんな時何か忙しくていい加減に相槌うつたりすると、今度はもっとはっきり私の足に手をかけるか何かして、'本当にもう産みますよ、いいですね'という具合です。ですから、子猫が産まれる時は絶対にわかるのです。

そして、お産をしている押入れのカーテン越しにずっとついてあげるので。スーピーがそうして欲しいと言ってます。そうしているともう、すぐに、かわいい泣き声が聞こえてきます。そして、ひとつ、ふたつ、だんだん泣き声が増えていくのです。

幾つもの小さな泣き声の合唱が始まりました。

to be continued

